

でもね…総合的な「文学館」がまだないのが残念！  
大阪人には小説家が多い



贈呈式のおこなわれる豪華な綿業会館入口(大阪市中央区)

「受賞しました!」という声が携帯から飛び出した。知人の小説家・堂垣園江さんからの電話で、2015年度の第32回織田作之助賞を、三浦しんさんと同時受賞したというのである。喜色溢れた声に、スクランブル交差点がいっせいに青信号になり、お祝いの言葉を呈しながら私は雑踏に踏み出した。

オダサクの愛称で知られる織田作之助について、あらためて述べることもないだろう。織田作之助賞は、大阪市と大阪文学振興会、関西大学、パソナグループ、毎日新聞社が組織する「織田作之助賞実行委員会」主催の文学賞で、昭和58(1983)年に織田作之助生誕70年を記念して創設された。賞は30回以上を数え、若手発掘の「青春賞」「U-18賞」も設けられている。大賞は熟練した実力派に与えられ、堂垣さんは『浪華古本屋騒動記』(講談社)、三浦さんは『あの家に暮らす四人の女』(中央公論新社)で受賞した。贈呈式は毎年三月、綿業会館で開かれる。

大阪市は、京都市と比べて美術家は少ないが、小説家なら圧倒的に多く生んでいると言われる。市立芸術大学がある京都に美術家が多いのは納得できるが、なぜ小説家に大阪出身が多いのか?人間の生きかたの機微を突く小説は、街の雑踏の空気を嗅いで育った大阪人の得意とするところでも言おうか。

西鶴、秋成にさかのぼらずとも、大阪市内生まれだけで、「直木賞」の由来となった直木三十五、「ノーベル文学賞」の川端康成はじめ、梶井基次郎、武田麟太郎、藤澤桓夫、織田作之助、黒岩重吾、五味康祐、司馬遼太郎、山崎豊子、開高健、小田実、田辺聖子、小松左京、筒井康隆、有栖川有栖など、錚々たる作家がすぐに思い浮かぶ。

しかしまた、不思議なことに、郷土の作家を顕彰する本格的な「文学館」が大阪市にはない。司馬遼太郎記念館は東大阪市だし、個人を記念する文学

館である。東京の日本近代文学館や横浜の神奈川近代文学館、鎌倉文学館などは、膨大な蔵書を蓄え、近代文学を再検証する企画展を開催している。そんな拠点が大阪にはないのだ。

実は、大阪市にも近代文学館構想があったが、立ち消えてしまった。公立の芸術大学もなく、文化施設も充実していない大阪が、どうやって今後の都市間競争を勝ち抜いていくのか心配だが、大半の大阪人には馬耳東風である。地方でも文学館の活動は熱く、以前、高知県立文学館でのシンポジウムにパネリストとして出席したとき、聴衆として詰めかけた地元の文学愛好者の熱烈な反応をうらやましく思った。

さて、堂垣さんは1996年に第39回群像新人文学賞優秀作でデビューし、カナダ、メキシコ滞在を経て2000年に帰国、2001年に『ベラクルス』で第23回野間文芸新人賞を受賞した。作品に『ライオン・ダンス』『グッピー・クッピー』などある。造詣深い南米文学に通じる匂いを漂わせながら、男性の筆かと思うほど文体はハードでエッジが立つが、『浪華古本屋騒動記』では、太閤さんのお宝探しに、老舗古書店三代目の高津と、桃神書房の啓太、チキチキ文庫のチキの三人が、古地図を手に取りまわる。個性的というか限りなくケツタイな登場人物たち。これはあの店の大将やないか、いやあの御仁かも、と不思議な世界に引き込まれる。

また単行本が出たとき、小説に登場する架空の本屋のラベルをみんなで考えた(下の写真)。将来、ほんものの古本屋で、『浪華古本屋騒動記』を買おうとした人がラベルを見つけ、「えーっ、小説の話と思ってたら、チキチキ文庫で実在したんや」と勘違いしたら面白かるうという、これまた大阪らしい、いちびり精神を盛りこんだ戯れである。

堂垣さん、まあ、ナンにしてもよろしおました。では受賞の弁を…と思ったら紙数がつきたので、これでお開き、後は書店で受賞作をお求めください。



団栗楼



チキチキ文庫



桃神書房

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—」(創元社)など。